

地域と大学を結ぶ実践コミュニティの生成：「旅する絵本カーニバル」の展開過程の分析を通して

新名, 佐知子
九州国立博物館学芸部

南, 博文
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/18423>

出版情報：九州大学心理学研究. 10, pp.113-123, 2009-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：

地域と大学を結ぶ実践コミュニティの生成 ——「旅する絵本カーニバル」の展開過程の分析を通して——

新名佐知子 九州国立博物館学芸部
南 博文 九州大学大学院人間環境学研究院

Generation of “Communities of practice” by merging the regional communities and university. A case-analysis of the developmental process in activities of “Picture Book Carnival”

Sachiko Niina (*Cultural and Historical Department, Kyushu National Museum*)

Hirofumi Minami (*Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University*)

Based on the previous study (Niina, 2007) in which a number of concepts concerning “communities of practice” were reviewed the present study investigated the way how the field for activity is generated by the university and regional communities by focusing on “ways of participation.” As cases for this investigation activities called “Picture book carnival” in Yamato town (Kumamoto Prefecture) were taken for the analyses of the process by which the field for activity was jointly generated by the university and regional communities on four occasions over the four years period.

Results indicated that over the period there was a shift in the responsible role from the university to the regional communities in the way how the participating groups are organized, the designing initiatives and the book selection were conducted. The region was connected with the university through “loose relations” by means of artifacts such as the picture books and the furniture used. A methodological implication of this study where the field for study itself is generated through the projective action by the practice-research was discussed.

Key Words: communities of practice, participation, action research, reflectivity in action

1. はじめに

近年、まちづくり活動、ベンチャービジネス、教育プログラムの開発のように大学と地域が協働で活動を行うことが盛んである。大学の「地域連携」活動の一環としてこれらの試みが実践的・社会的な意義を持つものである事は言うまでもないが、しかし同時に、一過性で終わったり、コンフリクトを生じるなど様々な事後的な問題点が発生している事が留意されなければならない。また、そのプロセスなどについては十分に検討されているとはいえない。特に、これらの事象をどのような理論的な視点の下で捉えるかが課題となっている。新名(2007)は、「大学と地域」という、相異なる二つのコミュニティが出会い、知識を生み出したり、地域資源を掘り起こしたり、地域が抱える問題を解決したりする活動の場が、どのように生成されるのかについて、「実践コミュニティ」に関する概念を概観し、整理を試みている。本稿は、その理論的な視点を継承し、筆者らも関わっている具体的な事例を取り上げて、実践の経年変化の中から活動を通じたコミュニティと呼べるような活動体が徐々に形成されていく変化過程を分析し、そこに含まれる生成原理を

明らかにする事を目的としている。さらに研究者自身が実践に関わりながら進められるタイプのアクションリサーチを「実践的アクションリサーチ」として特徴づけ、その方法論的な意義を議論した。

ここで、新名(2007)での実践コミュニティ概念に関する議論を簡単に確認したい。

「実践コミュニティ」は、レイヴ・ウェンガーによって提案された状況的学習論における重要な概念である。彼女らは学習をコミュニティの参加や、そこにおけるアイデンティティの成立の過程として見た(Lave & Wenger, 1991 佐伯訳 1993)。そこでは、「コミュニティ」を、地縁や帰属のつながりによる固定的な集団としてとらえるのではなく、「関心や熱意などを共有し交流する集団」というような、実践や活動に依拠する、動態的なものと設定している(佐伯 2001; Wenger & McDermott & Snyder, 2002 櫻井祐子他訳 2002)。一方、レイヴ・ウェンガーは「実践コミュニティ」を技能の習得レベルと地位の向上が一致している社会的評価体系として固定的に見るという批判もある。例えば、福島は「大学と地域」のようなコミュニティの協働においては、価値観が多様化しており一貫した評価体系がなく、獲得されるア

イデンティティがあいまいで、組織として不安定で危機に陥りやすいと述べている(福島, 2001)。

しかし、不安定としてとらえるのか、逆に、コミュニティの再編成を図る契機として積極的に捉えるのかは、「実践コミュニティ」という概念の運用の問題ではないだろうか。例えば、大学という専門機関と、地域現場との協働による、「発達のワークリサーチ」(Engstrom, 1987 山住他訳 1999) や「形成的フィールドワーク」(當眞, 2004, 2006) においては、専門家や研究者が現場へ「介入」することで、意図的に活動の場やそこに参加する人々の変容を試みようとしている。

「発達のワークリサーチ」は、現場が抱えている問題を解決するために、専門家はプロジェクトを立ち上げて現場に介入する。そして、「コミュニティ・労働の分配・ルール」からなるエンゲストロームの活動システムを用いて実践を分析し、実践を疎外している「矛盾」を見つけ、現場の者がその「矛盾」に自ら気づくような支援を行う。それは、専門家と現場の者が、共に矛盾を解消し新たな実践を創造していく手法である。そこでは「矛盾」やコンフリクトなどは個人的行為に原因があるのではなく、現場のシステムによるものとされ、その解決を目指した実践自体による、現場全体の変化を目指す(青山・茂呂, 2000; Engstrom, 1987 山住他訳 1999; 島田, 2005)。

「形成的フィールドワーク」は、その場の実践を研究者と実践者が共に批判的に検討していきながら、新たな実践を作っていくものである。具体的には、「見ること・聞くこと」、「観ること・聴くこと」、「診ること・訊くこと」というステップを経た関与観察を通じて実現される(當眞, 2004, 2006)。

このように「発達のワークリサーチ」、「形成的フィールドワーク」などでは、人だけではなく、活動の場そのものの変容をねらいとしている。また、「観察者」としての研究者や専門家を「介入者」として積極的に位置付け、当事者と共に協議の場をもつ体制を重視し、そこでおきる出来事そのものに意義を見出そうとする。しかし、あらためてこれらの概念を考察すると、「誰にとっての活動の場なのか」という主体や責任の問題、「実践や活動は実験なのか」という活動の進め方に関わる問題、「どのように活動の場として認知されるのか」という意識の問題については、研究者と当事者によってずれがあったように思う。それは、双方の「参加の仕方」の違いでもあった(新名, 2007)。

そこで、本稿では、前述のように提議された問題を踏まえながら、「大学と地域」による実践の具体的事例として「旅する絵本カーニバル」を取り上げて、「大学と地域」の「参加の仕方」の実態を検証する。「旅する絵本カーニバル」は、九州大学ユーザーサイエンス機構「子どもプロジェクト」(<http://kodomo-project.org/>) (以

下「子どもプロジェクト」)が、地域と連携して行う活動である。2005年度から始まり、2008年2月までに各地で41回を越す開催となり、その活動はさまざまな場所に広がりを見せ、子どもから大人まで多くの人が足を運ぶイベントとなっている。また、2006年には、空間のデザインと活動の社会的な影響力を認められて、グッドデザイン賞を受賞するに至っている。

この「旅する絵本カーニバル」を当事者である運営側の視点に焦点をあてて実践コミュニティの生成過程を分析し、「大学と地域」の参加の仕方の実態に迫りたい。この事例を取り上げた理由は、(1)筆者らが大学側の運営や一部の実施にも携っており、内部者の視点で事態の推移を参加観察する機会を豊富に持っている点、(2)4年間の継時的な推移の中で、いくつかの活動の基本形が生まれ、それが開催地や主催団体などの組み合わせによって変形し、目的との関係において発達・進化している可能性がある事(ただし、この点についての詳細な分析は今後の研究に委ねる)、の2点からである。

2. 調査内容

(1) 「旅する絵本カーニバル」の概要

2004年10月に九州大学COEプログラムとして立ち上がったユーザーサイエンス機構(4年間)の「子どもプロジェクト」が実施している活動である。「旅する絵本カーニバル」は、絵本を展示した空間づくりを工夫することで、人と人との出会いやつながり、また、物語と自分との対話のきっかけ作りを目的とした実践である。大まかには、「子どもプロジェクト」が所有する絵本から、あるテーマに沿って選んだ絵本を特定の地域で展示するもので、2~3日間または1週間~10日間、長いもので1ヶ月間の会期で開催している。開催地は、九州を中心に、東京、岐阜、沖縄などの各地でも行われ、病院、図書館、大学、美術館・博物館などの公共施設の他、カフェ、旅館、商店街、ショッピングモール、ファッションビルなどの商業施設でも開催している。主催は、大学と地域、大学と企業、大学と行政などそれぞれの地域において組織される実行委員会である(Table1)。実施回数は、2005年度10件、2006年度16件、2007年度(2007年4月~2008年2月)15件、計41件実施している(九州大学ユーザーサイエンス機構子どもプロジェクト, 2008)。

Table 1より、複数回実施しているのは、「大学と地域による実行委員会を組織したケース」に多いことがわかる。特にその中でも、山都町では2005年~2008年と毎年行っており、絵本カーニバルの実践が継続して行える何らかの理由があるものと思われる。

そこで、本稿では山都町での絵本カーニバルの事例を

Table 1
絵本カーニバルの実施形態（2005年度～2007年度）

大学の自主企画		大学と地域			大学と行政		大学と企業	その他
「子どもプロジェクト」によるイベント	「子どもプロジェクト」による小児医療センターの活動	地域による実行委員会	緩和ケアの活動	学校の活動	行政による実行委員会	文化施設等による実行委員会	企業による実行委員会	カンファレンスでのイベント
絵本カーニバル Petit (2005)	九州大学病院小児医療センター 2007.2.～2008.1 (1st.～12th.)	熊本/山都町 (2005～2008)	佐賀県立病院緩和ケア病棟 (2006)	九州大学伊都キャンパス (2006)	熊本/「南阿蘇えほんのくに誕生祭」 (2006)	長崎県立美術館「長崎メディアアート・エクスプレス」 (2006)	「環境フェスティバルふくおか」 (2005～2006)	東京/聖路加国際病院 (CLSカンファレンス) (2005)
九州大学大橋キャンパス (2005)		岐阜/料亭旅館無水亭 (2005, 2006)	福岡/原土井病院 緩和ケア病 (2007)	福岡/柳川市立柳南中学校 (2006)	福岡・久留米市/石橋美術館「チルドレンズキャンパス」 (2006)	山口/萩国際大学 体育館 (2006)	パークプレイス大分「シャングリラオープン1周年記念企画」 (2006)	九州大学箱崎キャンパス (日本発達心理学会 第17回大会) (2006)
アクロス福岡交流ギャラリー (2006)		福岡/志摩町立桜野公民館 (2005, 2006)				福岡/到津の森「えほん動物とおはなし展」 (2007)	長崎/五島市勤労福祉センター (2006)	
東京/グッドデザイン・プレゼンテーション (2006)		福岡/瀬高町/瀬高町立図書館 現・みやま市立図書館 (2005, 2008)				沖縄こどもの国「沖縄こどもの国 リニューアル3周年記念事業」 (2007)	大分/「大分街あそび計画 遊 vita! 2006 街なか絵本カーニバル」	
		福岡/宗像ユリックス (2006)				福岡/北九州市美術館「旅する絵本カーニバル in 北九州 2007」	福岡/田川市美術館「タイガー立石と摩訶不思議な絵本たち」 (2007)	
							福岡/北九州市美術館「旅する絵本カーニバル in 北九州 2007」	

□は、複数回実施しているところ。

取り上げたいと思う。山都町は、大学側として協力している「子どもプロジェクト」の担当者間で、地域側の関わりの深度がもっとも進んでいる実践例である事が聞き取りの中でも確認されている（この聞き取りの結果についても今後の研究によって公表をする予定である）。本稿は、第一研究として、まずは山都町の事例において、継続的に実施できる理由を、その過程に着目して探ることによって、大学と地域の参加の仕方についての示唆を得たいと思う。

(2) 調査方法

2005年～2008年に開催された熊本県上益城郡山都町においての「絵本カーニバル」の実践を取り扱う。「絵本カーニバル」は、九州大学「子どもプロジェクト」の一環であり、第一著者は、これにスタッフとして関わっており、第二著者は、プロジェクト・リーダーとして研

究面に関与している。この一連のプロジェクトの運営と同時に、実践現場で起こっていることを第一著者がメモに取り、第二著者を含めて実践に携わったスタッフへ実施後にインタビューするなど、リサーチを行っている。実施を進めていながら、同時に、地域の文脈や背景を理解しようとする立場である。このような進め方については、後に総合考察の部で「実践的アクションリサーチ」として議論する。

(3) 山都町「絵本カーニバル」の概要

熊本県南東部の山地に位置し、2005年に三つの町村が合併し誕生した人口1万9千人あまりの町で、「旅する絵本カーニバル in 山都町」が行われた。開催のきっかけは、「子どもプロジェクト」のディレクターの一人が、物産品を取り扱ったり町に伝わる清和文楽を上演したりする施設である道の駅「清和文楽邑」の代表者に開

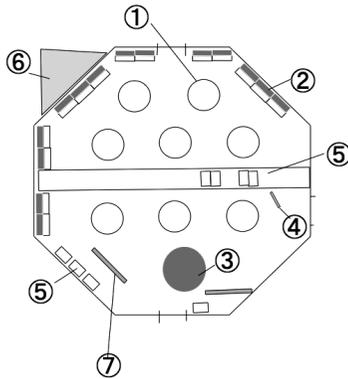


Fig.1-1

催を呼びかけたことによる。2005年～2008年の計4回の実施について、実行委員会の構成、運営費、会場デザイン及び絵本の選書などに視点を当てながら概要を見ていく。これらは、新名(2007)で提議された問題に即した3点である。すなわち、は主体に関わること、は主体及び活動の進め方に関わること、そしては当事者と研究者双方の意識に関わることであり、これらの視点より、それぞれの「参加の仕方」が探れるものと思われる。また、3点に注目する理由は、絵本カーニバルの全事例の比較検討から、絵本カーニバルの実施形態の事例間の推移と相互影響過程が、この3点を軸に分類・整理されるという予備的考察による(未発表の研究による)。

「旅する絵本カーニバル 2005 山都町」

(2005年7月30日～8月7日)

実行委員会は、山都町で図書活動しているボランティアのメンバー、「子どもプロジェクト」、山都町教育委員会によって構成された。実行委員長は山都町立図書館清和分館の職員であるY氏である。運営は、実行委員会に加えて、山都町の実行委員側によって募集された山都町内のボランティアが携わった。運営資金は、九大「子どもプロジェクト」の予算と山都町教育委員会の予算の一部を3:2の比率で負担された。

会場デザインは、「子どもプロジェクト」の設定した大テーマ「子どもの時間に出会う、夏」をもとに、「サーカス小屋のような雰囲気を出す」という「子どもプロジェクト」側のデザインに基づいて行われた。小川や緑に囲まれたガラス張りの会場に、円卓を設置し、赤い布を天井から張った(Fig.1-1, 1-2)。山都町スタッフは会場の外の道沿いに幕状の看板を設置したり、また、一定の距離ごとに看板を立てたりした。



Fig.1-2

円卓 絵本を置く。

食堂の机 通常食堂として使っている会場の机にボックスを重ねて絵本を置く。来場者は立ったまま絵本を手にとって読む。

カーペット 遊びのスペースとして使用する。おもちゃが置いてあり、小さな子どもが親子で靴を脱いで過ごす。

「絵本カーニバル」あいさつ文 「子どもプロジェクト」のリーダーによる文章のあいさつ。

カバン 中に絵本を置いて、装飾的につかう。

天井から吊り下げた布 赤い布を天井から吊り下げる。高い天井からの赤色は目立ち、インパクトがある。

その他 木製の長いベンチ

山都町が用意したのは食堂の机と木製の長いベンチ。絵本の選書は、大テーマをもとの「山と子どもたち」などの小テーマをもとに、山都町のロケーションを考慮したキーワードによって500冊を「子どもプロジェクト」が選んだ。会期中は、「子どもプロジェクト」から会場に1人～2人常駐し、運営に携わった。

このように、2005年は「子どもプロジェクト」側の設定テーマ、選書、デザインなどにしたがって、絵本カーニバルが行われたことがわかる。運営費や実行委員会について見ても、主体が「子どもプロジェクト」、山都町の関わりを従ということもできるだろう。

「絵本カーニバル 2006 in 山都町」

(2006年7月23日～7月30日)

実行委員会は、「子どもプロジェクト」、山都町教育委員会、前年の山都町のメンバーに、山都町立図書館の有志スタッフや子育て支援活動のサークル、科学遊びクラブなど、普段、子どもに関する何らかの活動に携わっているメンバーが加わった。ただ、「子どもプロジェクト」は他の開催地の準備や運営の多忙さから、会場のデザイ

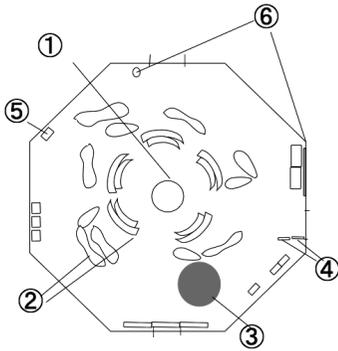


Fig.2-1



Fig.2-2

ン、設営のみの関与となった。運営費は、山都町の2006年度の予算として設定された、教育委員会の予算に加え、子どもに関する文化活動の助成をおこなう民間団体へ実行委員長のY氏が自ら申請した「子どもゆめ基金」助成金による。

会場デザインは、山都町の設定した全体テーマ「みちしるべ」に基づき、山都町側の意見を取り入れながら「子どもプロジェクト」が担当した。「細かな専門性のいる会場デザインについては「子どもプロジェクト」にお願いしたい」という山都町の意向によるものである(Fig.2-1, 2-2)。

みちしるべ 山都町の人々による選書テーマ「涙、冒険、友情、愛、生命」を標しており、会場の中央に設置される。

ビーンズ型机 今回の開催のために新調した机。選書テーマにあわせて「水色、ピンク、オレンジ、茶色、緑」の5つの色の机がある。

カーペット 前年度に引き続き遊びのスペース。親子で絵本を広げることもある。前年は、会場の状況を見ながらカーペットを広げたり直したりしていたが、2006年は初日から最終日まで広げたままだった。地元NPOによる親子の居場所活動がここで行われた。

ポスターとあいさつ文 「子どもプロジェクト」が山都町の人々の意向を反映して制作したポスターと、「子どもプロジェクト」のリーダーによるあいさつ文。

カバン 中に絵本を置いて、装飾的につかう。

その他 傘立て パーテーション

会場の設営具は、ほぼ全て「子どもプロジェクト」が用意した。山都町は傘立てと、バックヤードと会場とのパーテーションを用意した。これらは、会場設営を始めてから「あったほうがよい」と山都町の人たちが気づいて設置された。(傘立ては設営日から開幕して数日間、

雨天だったため、また、パーテーションは前年度の経験から、バックヤードと会場の仕切りが必要だと思い出したためである。)

絵本の選書は、山都町の人たちの設定した小テーマ「涙、冒険、友情、愛、生命」をもとに、「子どもプロジェクト」がピックアップした約600冊の中から500冊ほど山都町が選書した。山都町の実行委員が、開催にいたるまで600冊の絵本を広げて互いに読み合い、選書するという手順で検討された。選書作業では「どの絵本をどのキーワードに入れるか意見をまとめることできなかった」「選書はなんて大変な作業なんだろう。やってみて初めてわかった」など、容易ではなかったようだ。また、これらの小テーマは「みちしるべ」として会場の真ん中に設置され、会場デザインとテーマが連動するようにした。

このように、2006年の実践は、2005年に比較し山都町が実施に際して、関わりを深めようとしたことが分かる。これは、山都町スタッフの意識の変化に伴うものである。例えば、傘立てなど「あったほうがよい」と設営当日に山都町の人たちが気づいて、フォローする姿が見られた。大テーマの設定は、「同じ内容を繰り返しやっても意味がない。バージョンアップした山都町の『絵本カーニバル』を実施したい」という山都町の見解による。一方、会場デザインに関しては、「去年よりも面白くない」「カーニバルではない」という声が出ていた。「絵本の選書テーマと会場デザインにより統一性を出るようにしたい」という山都町の要望に対して、ビーンズ型の机を使おうとするなど「2005年とは異なる新たなデザインの実験に挑戦したい」とする「子どもプロジェクト」のすりあわせがうまくいかなかったためと思われる。

「絵本カーニバル2007 in 山都町」

(2007年7月28日～8月5日)

実行委員会は、山都町図書館が主催となった。メンバー

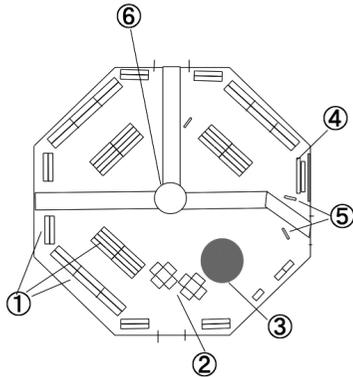


Fig.3-1

は、図書館スタッフが全面的に関わるとともに、新たにデザインに関心のあるボランティアなどが加わった。「子どもプロジェクト」は、会場デザインと設営、運営上のアイデアの提案における関わりとなった。運営資金は完全に山都町の教育委員会の予算による。

会場デザインは、「子どもプロジェクト」が提案したテーマ「たからものに出会いに」を基に行われた。「子どもプロジェクト」が他の「絵本カーニバル」の開催地でも用いられているパッケージを使った配置を行った。設営は前の2年間に比べて、短時間でスムーズに行われた (Fig.3-1, 3-2)。

パッケージ (板, 黒ボックス, アクリルパネル, ライトとテーマで選書された絵本)「子どもプロジェクト」が開発したもの。「子どもプロジェクト」から様々な開催地へ貸し出ししているものを山都町にも適用。

廃校の机と椅子 新しい試み「レビュー」を行うために設置された。「レビュー」は実行委員が予め絵本を読んで書いた紹介文を置いている。また、来場者にも感想を書いてもらう。

カーペット 過去2回に引き続き遊びのスペース。地元NPOによる親子の居場所活動も継続された。

ピクニック 新しい試み。お店のようなディスプレイに絵本が置かれている。その中で気に入った絵本があると敷物とともにバスケットに入れて会場外の広場へ行く。ピクニックのように外へ出かけて絵本に触れてもらおうというしかけ。

あいさつ文 毎年「子どもプロジェクト」のリーダーによる文章に、山都町の実行委員長の文章も併記したものが設置された。

その他 会場の中央にひとつだけ円卓が設置された。山都町はなるべく地元のを会場デザインに生かしたいという意向があり、町内の廃校の机と椅子を用意し



Fig.3-2

ていた。事前に九大が作成した会場の図面には廃校の机と椅子は書き込まれておらず、九大では設置を考えていなかった。そこで、山都町の人たちが設営当日、九大のパッケージが会場に設置された隙間にこれらが置かれる会場の形となった。

絵本の選書は、「去年は欲張りすぎた」という山都町側の反省に基づき、「子どもプロジェクト」の「絵本カーニバル」のパッケージを用いた。これによって選書に関する負担は山都町には発生しなかった。

その他、実行委員が初年度から希望していた、夜の時間の実施が実現された。会期中の土曜日を「夜のカーニバル」として会場を開放し、フルートとピアノの演奏に合わせて、実行委員がスクリーンに絵本を投影しながら読み聞かせを行うイベントなどが行われた。また、「旅する絵本カーニバル」の会場内で、地域の活動が展開される動きもみられた。会場近くの小学校の学童クラブのスタッフは、夏休みの学童クラブの子もたちを絵本カーニバルに連れてきて、会場で過ごしていた。また、親子の居場所作りを行っているNPOが、絵本カーニバルの会場内に乳幼児とお母さんが過ごせるスペースを作って活動を行っていた。

このように、2007年は、ある意味、山都町が主催する部分と、「子どもプロジェクト」が提供する部分が明確に線引きされたといえる。主催や予算がすべて山都町になったこと、会場デザインや絵本の選書に「子どもプロジェクト」のパッケージをそのまま用いていたこと、「子どもプロジェクト」の会場デザイン案では考えていなかった廃校の机と椅子を山都町の人たちが設置したこと、何より、これまで「子どもプロジェクト」が書いていたあいさつ文に、山都町の実行委員長のあいさつ文も併記されたことから、その様子が確認できる。

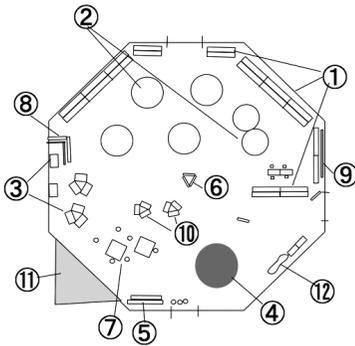


Fig.4-1

「絵本カーニバル 2008 in 山都町」
(2008年7月26日～8月3日)

実行委員会は、山都町立図書館が主催だった。メンバーは、従来の実行委員に、デザインを専攻する地元の学生や会場デザインを担当する地元デザイナーが新たに加わった。「子どもプロジェクト」は絵本や家具など設置具の貸出のみとなった。運営資金は、前年度に引き続き山都町教育委員会の予算によってまかなわれた。

会場デザインは、「自然への扉」というテーマを基に山都町が行った。前年度のように主にパッケージを使用するのに加えて、前回3年間に使用した設置具を再利用したり、アレンジしたり、また、新しい仕掛けを取り入れて組み合わせた (Fig.4-1, 4-2)。

- 円卓 2005年の会場で配置されたもの。
- パッケージ 2007年に引き続き使用。
- 廃校の机と椅子 2007年に引き続き使用。前回は「レビュー」を実施するために設置されたが、2008年は、会場内の絵本を読むスペースとして設置された。
- カーペット 過去に引き続き遊びのスペース。過去3回と同じように地元NPOによる親子の居場所活動が行われる。
- ピクニック 2007年に引き続き設置。2008年はすぐ外へ出て行きやすいように、扉の近くに設置された。
- あいさつ文 昨年に引き続き九大のリーダーと山都町の実行委員長の記事が併記されたものが設置された。
- 白木の机と椅子 新しく用意された子どもの大きさに合わせた小さな机と背丈の低い椅子。
- パーティションの本棚 山都町の隣町南阿蘇で開催した絵本カーニバルで使用したものの再利用。
- 葉っぱのレビュー 画用紙を切り抜いた「葉っぱ」に絵本の感想を来場者に書いてもらい、会場内の壁に掲示する。2007年の「レビュー」をアレンジした仕掛け。



Fig.4-2

長生きの絵本 カバンの中に「長生きの絵本」というテーマの絵本が置かれた。

天井から吊り下げられた布。

その他 2007年に使用したビーズ型機が一つだけ受付用のテーブルとして使用された。

絵本の選書は、前年同様、パッケージを用いたのに加えて、「長生きの絵本」というテーマで、3世代に渡って読み継がれている絵本を選んで紹介する、新しいコーナーを設けた。

その他、2005年以来、天井から布を吊り下げることに取り組んだ。2005年は非常に高い天井に業者の技術で布が吊り下げられたが、2006年、2007年は業者に頼む資金の余裕がなく、あきらめていた。しかし2008年は、実行委員の一人が茶農家であり、茶畑専用の高いはしごを使用することで吊り下げられ、また、ある実行委員が、絵本カーニバル会場の外の竹を切り出し、吊り下げた布をうまい具合に固定することで実現することができた。山都の人たちは布のことを「絵本カーニバルの象徴だ」といった。

絵本カーニバルの開催ポスターやチラシは、それまで「子どもプロジェクト」がデザインしていたが、山都町の人たちが地元でデザインを学ぶ学生に呼びかけてイラストのコンペを行い、さらに地元のデザイナーに編集を依頼して作成した。

このように、2008年の実践は、山都町が主体になったことがわかる。主催、予算が前年度に引き続いて山都町であったこと、会場デザインや絵本の選書は「子どもプロジェクト」のパッケージをそのまま用いるのではなく、アレンジが加えられたこと、ポスターやチラシは地元の学生やデザイナーの協力によって作成出来たこと、何よりも、山都町の人たちが、「絵本カーニバルの象徴」と言った天井からの布の吊り下げが、山都町の人たちで実現出来たことに現われている。

Table 2
山都町絵本カーニバルの変遷

	2005	2006	2007	2008
実行委員会	「子どもプロジェクト」 実行委員長 Y氏 (山都町 立図書館清和分館) 実行副委員長 S氏 山都町立図書館長 読みきかせの会 M氏 清和文楽邑 代表者 山都町教育委員会	「子どもプロジェクト」 実行委員長 Y氏 (山都町 立図書館清和分館) 実行副委員長 S氏 山都町立図書館長 読みきかせの会 M氏 清和文楽邑 代表者 山都町教育委員会	「子どもプロジェクト」 実行委員長 Y氏 (山都町 立図書館清和分館) 山都町立図書館長 読みきかせの会 M氏 山都町立図書館スタッフ 清和文楽邑 代表者 山都町教育委員会	実行委員長 Y氏 (山都町 立図書館清和分館) 山都町立図書館長 読みきかせの会 M氏 山都町立図書館スタッフ 清和文楽邑 代表者 山都町教育委員会 地元デザイナー
運営協力者	山都町内ボランティア	山都町内ボランティア 山都町立図書館有志スタッフ 山都町地域子育て支援センター 親子の居場所活動NPO 科学遊びクラブ 清和小学校学童保育	山都町内ボランティア 山都町地域子育て支援センター 親子の居場所活動NPO 科学遊びクラブ 清和小学校学童保育 デザインに関心のあるボランティア	山都町内ボランティア 山都町地域子育て支援センター 親子の居場所活動NPO 科学遊びクラブ 清和小学校学童保育 デザインに関心のあるボランティア デザインを学ぶ地元学生
運営費	「子どもプロジェクト」: 山都町教育委員会 3:2	山都町教育委員会予算 「子どもゆめ基金」助成金	山都町教育委員会予算	山都町教育委員会予算
運営	「子どもプロジェクト」と 山都町	山都町	山都町	山都町
会場デザイン	「子どもプロジェクト」	「子どもプロジェクト」	「子どもプロジェクト」	山都町
主な設置具	円卓, 天井から吊り下げた 布	ビーンズ型テーブル, みち しるべ	パッケージ	アレンジされたパッケージ 新しい設置具との組み合わせ 天井から吊り下げた布
ポスターの 作成	「子どもプロジェクト」	「子どもプロジェクト」	「子どもプロジェクト」	山都町
あいさつ文	「子どもプロジェクト」	「子どもプロジェクト」	「子どもプロジェクト」と 山都町	「子どもプロジェクト」と 山都町
絵本の選書	「子どもプロジェクト」ディ レクターによる選書 500冊	山都町による選書 「子どもプロジェクト」が 用意した 600冊から選んだ 500冊	パッケージを用いた 500冊	パッケージを用いた 500冊

3. 考 察

以上、山都町での「絵本カーニバル」の開催形態と運営・実施の様態の経年変化を 実行委員会の構成、運営費、会場デザイン及び絵本の選書の3点を中心に整理してきた。4年の実践を経て最終的には、実行委員会と運営費の主体は山都町にあり、九大は絵本の選書と会場のデザインというパッケージの提供を行う、参加の仕方となった。このイベントは来年度も継続する予定であり、「はじめに」で問題として記したような一過性のイベントの段階を越え、持続性のある活動として地域に定着している事が読み取れる。今後の継続形態を考えると、例えば、山都町が完全に自立し、大学側が運営その他の活動から撤退するというあり方も、本稿から明らかになった傾向を敷衍すると予想する事も可能である。しかし、それは、あらかじめの主体として九大「子どもプロジェ

クト」と山都町を想定し、その関係で絵本カーニバルを実施するというとらえ方のように思う。「実践コミュニティ」という概念からは、異なるとらえ方ができるのではないか。

振り返ってみれば、山都町での実践は、「子どもプロジェクト」のメンバーの一人の飛び込みという、偶然性の強い出来事から始まっている。そのことをきっかけに、「絵本カーニバル」が実践されるに従って、既存の図書館や教育委員会、町内のボランティアなどの関係が再編成されていった。九大のデザインに惹かれて、デザインの得意な地域の人々が参加している姿もあった。絵本の選書に山都町が取り組もうとしたり、逆にそれをやめて「子どもプロジェクト」のパッケージを活用したりする過程もあった。4年間の変遷を全体的に見ていくと (Table 2)、運営協力者の拡充や、運営主体、運営費の欄に見られるように、当初「子どもプロジェクト」にあっ

たイニシアティブが、2年目からすでに山都町に移行し、2008年においては、会場デザインの担い手に象徴されるように、実践の「看板」であるポスターも中身も山都町主体の実施となっている事が注目される。この変遷には、Rogoff (1991) が、親子関係に見られる認知的徒弟制の発達過程で理論化したように、責任の所在が、親側から子ども側へと転移 (transfer) していく関係における主体変化の過程を類比的にあてはめる事ができる。

一方で、実行委員会の構成を見ると、3年間は比較的安定しており、この構造が「受け皿」となって2年目、3年目へと引き継がれる「絵本カーニバル」の連続性を保証しながら、同時に運営の仕方や会場デザインにおける「革新 (イノベーション)」を呼び起こす基体として機能したものと考えられる (向井, 2007)。4年目に入って、運営委員会に「子どもプロジェクト」が入っていない事がここで改めて注目される。3年目から4年目にかけて、運営形態においても、またデザインの各部においても質的変容が生じている。自立的な運営とそれを可能にする組織がこの年には成立していると考えられる。

最終的には、現在、「子どもプロジェクト」と山都町は「絵本カーニバル」のパッケージという人工物によって、やわらかな関係性を結んでいる。このような動的な過程の中で、そこに新しい実践コミュニティ=山都町という主体が生成されたと見るのが妥当ではないだろうか。なぜなら、人や予算も含めて、そのような主体は2004年度までは存在しなかったのである。

このように、コミュニティ自身が実践によって構成されるという「実践コミュニティ」の考え方からすれば、大学と地域のイベントの一つのあり方が模索できるのではないか。イベントの成否を評価する基準として、来場者数などの量とか数とかだけが問題になることが多く、また行政上の現実からは、予算をイベントによって消化するとか、地域がそれに協力するなど、功利的で一方的な関係としてイベントを見る視線がある。そこで言われる「参加」や「介入」などの行為は、既に規定された所与の実体としての行事やイベントを想定する閉じられた関係性が前提になっている。

むしろ分析しなければならないのは、イベントによって、どのようなコミュニティが形成されているのか、どのような人がメンバーに加わったり可視化されたりしているのか、人々を結び付けている人工物は何か、それらはどのような関係になっているのかなどを丁寧に見ていくことではないか。それを分析し関係的に位置付けていくことが必要ではないか。なぜなら、予算、パッケージ、ボランティアなど、山都町を取り巻く絵本カーニバルの唯一つの資源が欠けたとしても、絵本カーニバルは立ち行かなくなるように思うからである。このようなコミュニティの生成過程に参与し、それを構成する部分のバリ

エーションと変容 (transformation) がどのような力動によって結びつき、「全体としての『場』」を生み出していくかを、行為者の位相に立ちながら、その内実と過程の詳細を追跡していくアプローチがここでは求められよう。このようなアプローチを、実践的アクションリサーチとして捉え、その方法論的な意義を総合考察において議論する。

4. 総合考察

大学と地域による実践に対する参加の仕方について新名 (2007) は、実践コミュニティ論をベースにしながら、従来の研究と理論的視座をレビューする中で、誰にとつての活動の場なのか、実践や活動は実験なのか、どのように活動の場として認知されるのか、という3点からこの領域への問題提議を行なっている。本稿で事例として取り上げ、経年変化過程を分析した山都町での絵本カーニバルを踏まえて考えてみると、活動の主体、責任、進め方、意識にかかわるこれらの問題性は「実践コミュニティ」論が「閉じられた関係性」を前提に議論されていることに由来している事が改めて浮上してくる。

山都町絵本カーニバルの展開分析で確認出来た参加の仕方は、山都町が実践への関わりを深めたり、九大「子どもプロジェクト」と山都町双方の役割が線引きされるようになったりしながら、現在形としてはパッケージを通じたやわらかな関係性が形成されるという動的な過程の中で、新しい実践コミュニティ=山都町が生成される経緯であった。「山都町」の新しい実践コミュニティは、「子どもプロジェクト」の関わりが小さくなり、様々な集団単位に所属する山都町の人々が「『山都町』という同じ地域の中でやっている」という共同性の意識を次第に持つようになる過程と共に発生している。このように新しい実践コミュニティは「地域が開いていくこと」に作用しているのである。そして組織上は大学に属する「子どもプロジェクト」は、「絵本カーニバル」という汎用性の高い活動を山都町という地域単位において実現する過程で、実践コミュニティ生成の媒介的な役割を果たしている。

子どもプロジェクトは、その名称にもあるように「プロジェクト」すなわち自己投企の行為性 (フルッサー, 1996) をもって地域への活動提案を行なう集合体として機能している。ここで企図される実践は、当初から存在する対象領域ではなく、プロジェクトの実施によって「対象を実現する」(Kant, 1787) という意味での「実践的」な性格をもっている。この意味で、本稿で紹介された研究を「参加」観察と呼ぶ事は正確ではない。なぜなら参加されるべき現場 (フィールド) は、実践の前には存在しないからである。本稿の著者らは、プロジェクト

のメンバーとして「絵本カーニバル」の計画や実施に携わり、その過程で連携をとる活動団体との関係を築いていくが、その相手先も上述したように当初から出来上がっているものではなく、プロジェクトの進行と共に徐々に形成され変容を遂げていく「活動の場」である。研究者も含めた関わり手の行為の遂行に応じて時々刻々と実現していくこのようなフィールドを研究する手法は、必然的に反省的 (reflective) な性格を持ったものとなる (Schon, 1983)。「今進行している出来事のただなかで、自らの行動に適用できる知識をもたらす」探求としてのアクションリサーチ (Taylor, 1994) であり、研究者自らの参与を不可欠とする「参与的アクションリサーチ (participatory action research)」とも言えるが (Kemmis & McTaggart, 2000), 先にも述べたように参与すべき現場があらかじめ与えられず実践によって切り開かれ、展開する現場に関与するという意味から「実践的アクションリサーチ」と名づけるのが適当ではないかと考える。

本稿では言及できなかったが、絵本カーニバルは山都町に限らず、さまざまな場所で展開しており、年を重ねる度に段々と各地に広がっている。その過程で、絵本カーニバルの原型がわからなくなるほどアレンジが加えられて実施されたり、地域が主体となって継続的に実施している一方で、様々な文脈による開催が広がり、拡散していく流れも見られる。今後は、各地へ活動が波及する「広がり」と、地域が主体になり、地域が開いていく「広がり」が同時進行的に起きているこのような絵本カーニバルの現象を整理し、体系的に展開の解明を図りたいと考えている。それは、地域と大学との連携という社会的な意義を持つ大きな課題に対する、一つの切り口を提供する実証的研究であり、同時に社会に新たな場が生成されていく実践的アクションリサーチの試みともなるであろう。

引用文献

- 青山征彦・茂呂雄二 (2000). 活動と文化の心理学 心理学評論, 43, 87-104.
- Bronfenbrenner, U. (1979). *The ecology of human development: experiments by nature and design*. (ブロンフェンブレナー, U. 磯貝芳郎・福富護 (訳) (1992) 人間発達生態学: 発達心理学への挑戦 川島書店)
- Engestrom, Y. (1987). *Learning by Expanding: an activity-theoretical approach to developmental research*. Helsinki: Orienta-Konsultit. (エンゲストローム, Y. 山住勝広・松下佳代・百合草禎二・保坂裕子・庄井良信・手取義宏・高橋登 (訳) (1999). 拡張による学習 新曜社)
- 福島真人 (2001). 状況・行為・内省 茂呂雄二 (編著) 状況論的アプローチ 3 実践のエスノグラフィ 金子書房 pp.129-177.
- フルッサー, V. (1996). サブジェクトからプロジェクトへ 村上 淳一 (翻訳) 東京大学出版会
- Kant, I. (1787). *Kritik der reinen Vernunft*. (カント著 篠田英雄訳 純粋理性批判 (上) 岩波文庫 1961)
- Kennis, S., & McTaggart, R. (2000). Participatory action research. In Denzin, N.K., & Lincoln, Y.S. (Eds.) *Handbook of qualitative research: Second Edition*. London: Sage Publications, Inc.
- 九州大学ユーザーサイエンス機構子どもプロジェクト (編). (2008). 子どもの時間に出会う旅 - 絵本カーニバルのつくりかた. 九州大学ユーザーサイエンス機構.
- Lave, J. & Wenger, E. (1991). *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*. Cambridge University Press. (レイヴ, J. & ウェンガー, E. 佐伯 胖 (訳) (1993). 状況に埋め込まれた学習: 正統的周辺参加産業図書)
- 向井博敬 (2004). コミュニティを変えていく小さな集団の活動過程について. 九州大学心理学研究, 5, 65-75.
- 新名佐知子 (2007). 大学と地域による活動の場の生成 実践共同体に関する文献研究 九州大学心理学研究, 8, 85-90.
- Rogoff, B. (1991). *Apprenticeship in thinking: Cognitive development in social context*. Oxford: Oxford University Press.
- Rogoff, B. (2003). *The cultural nature of human development* (ロゴフ, B. 當眞千賀子 (訳) (2006). 文化的営みとしての発達 個人, 世代, コミュニティ 新曜社)
- Schon, D.A. (1983). *The reflective practitioner: How professionals think in action*. New York: Basic Books, Inc., Publishers.
- 佐伯 胖 (2001). 学習とは、実践共同体への参加である 子どもの文化, 33-8, 36-43, 子どもの文化研究所
- 佐古順彦 (2007). 環境心理学の期限と展望 佐古順彦・小西啓史 (編) 環境心理学 (朝倉心理学講座 12), 朝倉書店 pp.1-20
- 島田 希 (2005). 教育実践研究における介入の方法論としての発達のワークリサーチ ヴィゴツキー理論の応用へ 教育科学セミナー, 36, 37-47.
- Taylor, M. (1994). Action research. In Banister, P., Burman, E., Parker, I., Taylor, M., & Tindall, C. *Qualitative*

- methods in psychology. Open University Press UK Limited.
- (五十嵐靖博・河野哲也 (監訳) 質的心理学研究法入門 - リフレキシビティの視点 新曜社 2008年)
- 當眞千賀子 (2004). 問いに導かれて方法が生まれるとき - 形成的フィールドワークという方法 - 臨床心理学 4-6, 771-783.
- 當眞千賀子 (2006). 形成的フィールドワークという方法 問いに応える方法工夫 吉田寿夫 (編著) 心理学研究法の新しいかたち 誠信書房 pp.170-194.
- Wenger, E. & McDermott, R.A. & Snyder, W. (2002). *Cultivating Communities Of Practice: A Guide To Managing Knowledge*. Boston, MA: Harvard Business School Press.
- (ウエンガー, E. , マクダーモット R.A. & スナイダー, W. (著) 櫻井祐子 (訳)・野村恭彦 (監修)・野中郁次郎 (解説) (2002). コミュニティ・オブ・プラクティス：ナレッジ社会の新たな知識形態の実践 翔泳社)